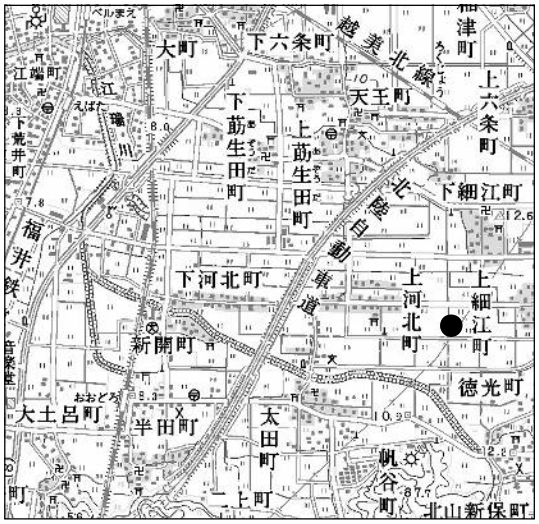
15. 上河北江原町遺跡（かみこぎたえはらまちいせき）

所 在 地 ：福井市上河北町
調査原因：一般県道徳光福井線道路改良工事
調査期間：令和元年７月１日～12 月 27 日
調査面積：1,380 ㎡
時　代　：弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・中世



位置図（S=1/50,000）

調査の概要　上河北江原町遺跡は、福井平野の東南部、上河北の集落とその西側に広がる弥生時代から中世にかけての遺跡です。遺跡の範囲内で一般県道徳光福井線道路改良工事が行われることとなったため、工事に先立ち令和元年度から令和２年度にかけて、工事予定地内の発掘調査を行うこととなりました。

今回発表する令和元年度の発掘調査では、現代の水田の下から、今から 1,700 年ほど前の弥生時代終わりごろの建物跡や溝、多くの土器などが見つかりました。

遺構　平地式建物と竪穴式建物が各１棟、掘立柱建物４棟以上とそれを含む柱穴・小穴約 430 基、溝 71 条などが見つかりました。

今回見つかった平地式建物は、一辺７ｍほどの四角く巡る溝の中に６基の柱穴が並んでいました。竪穴式建物は、一辺６ｍほどの四角い形に地面を掘りくぼめたものです。

掘立柱建物は、縦横４×５～６×３ｍのものが４棟見つかりました。このうち１棟は、布掘りといわれる、溝を掘ってその中に複数の柱を建てる構造をしています。

調査範囲の中央付近では柱穴や柱穴の可能性が考えられる小穴が密集して見つかりました。これらの穴からは柱の根元や柱の下に敷いた板が残っているもの、植物を敷いたものがありました。また、柱を抜いた後の穴に捨てたのか、たくさんの土器が入ったものも見られました。柱穴があまりに密集しているため、１棟１棟の建物を識別することは難しいですが、掘立柱建物や平地式建物が建っていたと推測できます。

この柱穴が密集した範囲の周りで 10 条ほどの溝が見つかりました。これらの溝は、それより北側で遺構が急激に少なくなるので、集落の境など土地を区画するために掘られた溝である可能性があります。また、平地式建物の溝が含まれているかもしれません。

遺物　弥生時代終わりごろの土器が、溝や竪穴式建物などから見つかりました。このほか、溝から青銅製の鏃が、竪穴式建物から管玉などの玉類とその原料となる石材が出土しました。

まとめ　見つかった土器はいずれも弥生時代終わりごろのものなので、遺構もこの時期のものと考えられます。今回の調査では、掘立柱建物や平地式建物などが建った弥生時代終わりごろの集落の様子をとらえることができました。　（吉田悠歩）

溝から見つかった土器

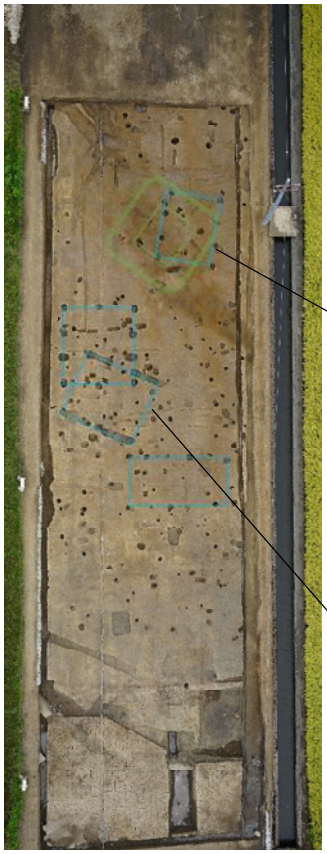
柱穴などが密集した範囲。下の写真のような遺物が見つかった。

柱穴から見つかった柱の根元

柱穴の中に敷いた板

柱穴の中に敷いた植物

柱穴の中に捨てられた土器



平地式建物と掘立柱建物

平地式建物は６基の柱穴（内側の緑色の線）の周囲に溝（外側の緑色の線）が廻る。掘立柱建物は８基の柱穴が四角く並ぶ（水色の線）。

布掘りの掘立柱建物

４本の溝が四角く並ぶ（水色の線）。それぞれの溝の両端には柱穴が掘られている。

上段　発掘調査区北半部　　掘立柱建物

下段　発掘調査区南半部　　竪穴式・平地式建物

発掘調査は、調査区を南半と北半に分けて行った。

どちらの写真も上が北側。